

TOKYO美人と、東京100ストーリー

婚約者は刑事 ④ 4回連載(007) 用賀

穂高健一

井伊佳元は用賀駅まえから、布施和香奈と肩をならべ、砧公園にむかっていた。路面には、万葉和歌が風流な文字で彫られている。3月半ばの木漏れ日が、それら万葉歌人と戯れていた。

清流と古の風情がたつぷりの『用賀いらか道』だった。歴史好きの井伊には心地よかった。時おり、その和歌を口ずさんでいた。

「わたし人質ですよ。溝口さんはきつと、わたしが誘拐されたものだと思っているわ。いい加減さんの言い方には、ドスがありましたもの」

彼女は多摩川からここまで、それをなんども話題にしていた。



「犯罪史上、こんなにも笑い顔の人質はめずらしいだろうな」

井伊の視線が路面の和歌から、和香奈にむけられた。

「いまごろ誘拐事件として、警察はたいへんな騒ぎでしようね。きつと」

「警察にしゃべると、布施和香奈の生命はないぞ。しやべったら殺す、と脅して

おくべきだったかな。あいては刑事だ、無意味な要求にしろ」「そう言えばよかったのに。彼って、どう応えたのかしら?」

「決まっているさ」

「どんなふうによ?」

和香奈が首をかしげた。「ボクは、もう和香奈への愛は冷めているんだ。日比谷公園のひとことで。彼女とは無関係だ。和香奈を殺そうが、多摩川に棄てようが、どうぞ、ご自由に。ご勝手に」

「ひどい」

彼女が口を尖らせた。

「彼にすれば、職業は刑事だ。内心はそう思っても、殺してもいい、と口には出せない。警察官として、つらい立場だ」

「いい加減さんは、おもしろがっていますけど、いまの自分の立場がわかっているのかしら?」



「誘拐犯」

井伊は平然といった。

「そう、凶悪な犯人。それに、溝口さんは本庁捜査二課の刑事で、まわりにはプロちゆうのプロの、腕利き刑事がいっぱいいるんです。取り囲まれて、誘拐犯として逮捕されたら、どうします？ 刑務所ゆきですよ。これは現実のはなし」

「逮捕されるか、上手に逃げられるか。迷宮入りめいきゆうの幻まぼろしの誘拐事件か？ 結果は神のみぞ知る。ところで、溝口刑事の2度目のドタキャンの理由は？」

かれはさつきから、どうも納得できない、気になっている話題を取りあげた。

「お話ししたかと思えますけど、捜査上の秘密だそうです。彼はふだんから『捜査は秘密が原則。家族にもしやべれない』とはなしていますから」

「本人から、結婚式場に連絡がきたのか？」

「いいえ。警察の同僚どうりょうから、式場の溝口さんのご両親に。そして、わたしたち親族に伝えられました。ショックでした。死にたいほどに」

和香奈は水路に架かかった橋まで歩み寄った。そして、清流をのぞき込んだ。彼女の複雑な心の想いが、川面に映し出されている。井伊はそのように和香奈の胸の奥を推し量はかっていた。

「溝口刑事からは、いつ連絡れんらくが入った？」

「6日後です。それは長い空洞くうどうでした」

「そんなにも後で？ なにか胡散臭うさんくさいな」

「溝口さんは急に、犯人のアジトに潜伏かく伏したんですって。わたしの心は傷ついているのよ、といいましたら、なんども謝あやまっていました」

「捜査上の秘密とか、犯人のアジトに潜伏とか、どうも納得できないはなしだ。溝口刑事は捜査一課のどんな係り？」

「強行犯捜査係ですって」

橋のうえから、彼女が視線をこちらにむけた。

「捜査一課は殺人、強盗、強姦、放火などを捜査するセクショんだ。公安警察とはちがう。アジトに潜入したとは考えにくい。まして、拳銃におどろく、ドジな刑事に潜入させるはずがない」

「わたし、警察の内部事情なんて、良くわかりません」

橋の上からもどってきた彼女が、その話題をきらうかのように、用賀いらか道を歩きはじめた。井伊は横ならびになると、「城山先生は、はたしてフラワーランドにいるのかな？」

「どうかしら？」

和香奈は素っ気ない返事だった。



ふたりはいましたが、用賀駅にほど近い、『きぬた美術学校』に立ち寄ってきたのだ。彫刻科コースの非常勤講師が6、7人の美大受験生の指導していた。城山先生なら、午後からフラワーランドで絵を描いているはずです、とおしえてくれた。

井伊はその場で、城山比呂志に電話を入れてみた。通じなかった。芸術家は創作のさなか神経を集中するためにも、ケイタイをOFFにしているのだろう。

銀座のTAKANO画廊に展示された『水瓶と猫』から猫が消えた。この怪事件の真相に迫るためには、画家の城山比呂志から話をきく必要があるのだ。

交通量の多い環八を渡ると、そのさきに砧公園の森がみえてきた。まだ、枯葉色だった。右手の歩道をすすむと、信号機には、『砧公園入口』の表示があった。園内に入ると、冬の名残りの森と広場だった。



枯れた芝生の上では、家族連れが3月の陽さしを浴びていた。男児がボールを追い、女兒がなわ跳びをしている。小学生たちがローリースケートをする。こうした情景があちらこちらで見られた。

「気が重い。城山先生に会うのは。わたし隠れていても良いかし

ら」

「なにごとも、逃げていると、良い解決が期待できない。あえて火中の栗を拾う、という精神だ」

井伊は彼女の困惑した顔をみつめた。

「明日の午後3時には、城山先生が銀座の画廊にいらっしゃる。猫が消えていると、すぐばれてしまう。わたしが前日に、その事実を伏せてフラワーランドで、何食わぬ顔して、先生と会っていたと批判されます……」

「池袋の裏稼業人が、明日の午後3時までには、問題の猫を取りもどす。この約束を信じてないな」

「方が一、解決できなかったら、どうなります？ わたしには立つ瀬がありません。先生に会わず顔もなくなりませう」

「それなら、きょう思い切つて、猫が消えた事件を話してみたら」

「わたし帰ります」

「ダメだ。気が弱い女だな」

井伊は和香奈の腕をつかんだ。

「猫の話は持ちださないでください。約束してくれませんか、本とうに帰ります」

「猫はやめておく。『水瓶と落葉』は良い作品ですね、と誉めて

おく」

「もういや」

「わかったよ。猫は止めて、さしさわりなく水瓶だけに留めおくから」

砧公園を通り抜けたふたりは、フラワーランドの表示板に沿った住宅街に入った。

井伊の頭脳が猫事件の推理にむけられた。……城山比呂志作品の価格から判断すれば、数千万、数億の絵画を狙う外国人窃盗団の事件とは考えにくい。猫事件の背後には、画廊への憎しみとか、恨みとかがあるのか。あるいは城山比呂志には何者かと秘められた確執があるのか。それとも単なる受賞作への妬みなのか。「城山先生の受賞作の水瓶ですけど、実家の座敷でつかう火鉢とよく似ているんです」

最近では和座敷でも、電化製品の暖房器具が使われ、瀬戸物の火鉢がずいぶんあまっています。庭弄りが好きな父親が、庭の水瓶とか、逆さにして庭の椅子とか、小さなスコップの道具入れとかに使っています。そんなふうには和香奈が火鉢の使い勝手を語っていた。



「外国でも、ガーデニングの体裁づくりから、日本製とか、中国製とかの瀬戸物が好まれているようだ」

井伊がいった。

「ニュージージーランドでも、瀬戸物が人気なのかしら。城山先生が

現地で描いたくらいですから。きっとそうでしょうね」

「ところで、溝口刑事の経歴を聞かせてもらおうか？」

かれは話題を変えた。

「中学、高校のときから検事になりたくて、司法試験の合格率が高い大学を目指して、勉強していたそうです」

「すると、法学部出身？」

「ちがいます。第一志望がだめで、その大学の経済学部に入ったんです。ですから、司法試験でなく、国家公務員試験をめざしたのです」

「I種はダメで、II種合格だった。いまの階級は警部だから、II種で警察庁に入庁した、準キャリアだ」

溝口刑事がもしも国家公務員I種合格者のキャリアならば、30歳で、すでに警視になってはいるはずだと、補足した。

「よくわかるんですね」

「スーパーは犯罪の宝庫だ。万引きを捕まえる保安員のなかには、元警官が何人もいる。しぜん警察知識が豊富になってくる。こうした情報は聞くとはなしに聞ける」

準キャリアのかれらは警視庁、府警、大きな県警に出むいたり、霞ヶ関の警察庁にもどったりしながら、地位が上がっていく仕組みだ、と井伊はつけ加えた。



「溝口さんからは以前、警視庁の巡査から歩んだら、警部は定年まえにたどりつける地位だよ、と聞かされたことがあります」

「そのとおり。男女を問わず国家公務員Ⅱ種で警察庁に入ると、キャリアに準じた幹部候補生の待遇を受ける。銃声におどろいて階段から転落しても、ダメ刑事でも、お荷物さん、おドジな刑事さんでも、警視庁捜査一課の係長に座っていられる。官僚組織はあるていどまで、ワンパターンの階段式だから。奇異な社会システムが幸いして、早ばやと警部だ」

「それって、溝口さんの悪口？ いい加減さん、あまり彼を悪くいわないでちょうだい。あしたは結婚式を挙げて、夫になるひとですから」

「そうか、あしたは夫婦か」

「肝心なことです。忘れないでくださいね」

「溝口刑事との出会いとか、交際のきっかけは？」

「もう4年になります。うちの画廊に、刃物を持つた強盗が押し入ってきた事件がありました。そのとき、姉の麻耶子が機転を利かせ、隠れて110番したんです。溝口さんは捜査人の一人というよりも、警察庁の中堅幹部の研修で、現場にいたそうです」

「ドジったな」

「勇敢でした。犯人と格闘して」

「それはうそだな」

井伊は頭から否定する態度だった。

「実は、破れかぶれになった犯人が突然、刃物をふり回して、取

りかこむ警察に突進してきたんです。避けそこねた溝口さんが腹部を刺されたんです。2ヶ月間も入院する重体でした」

「あなたが病院に見舞いに行った。それから交際がはじまった？」

「見舞いは一度だけです。かれが霞ヶ関の警察庁に転勤になったときでした、日比谷で呼び止められ、その節はご迷惑をかけました、と挨拶されました。お見舞いのお返しといい、有楽町の東海道線ガード下の、焼き鳥屋さんに誘われたのです。それからのお付き合いです」

「立てつづけの質問だが、猫事件の経緯が知りたい。おとこの夜、つまり3月10日、画廊を施錠した時間は何？」

井伊は、事件の解明に必要な、情報収集に気持ちをむけていた。

「施錠は夜8時半です。2人のパートさんはいつも7時の定時で、退社しています。この日も同じです。わたしが1時間半ほど残業して帰りました」

「絵の猫は？」

「異状なしです。退社時にはかならず展示品をチェックしていますから。まちがいありません」



画廊は高価な絵画とか陶器とうきとか、芸術品を取り扱う。それだけに、警備会社とのオンラインで結ばれているはず。……機械警備をセットしたならば、不審者がかもし画廊に押し込めば、センサーが感知かんちする。ブザーが鳴りひびく。他方で、警備会社の情報センサーから、第一通報者に連絡がいく。

井伊はスーパーステムと重ね合わせてとらえていた。

「猫事件に気づいたのは？」

「次の朝10時半に出勤して、1時間くらい経たったところです」

「すると、11日水曜日の11時半だな。出勤後の1時間は？」

「それら時間を頭脳あたまに刻み込みながら、かれは質問をつづけた。

「城山比呂志展の受付台のセットをしたり、価格カードを作成したり、赤いボッチとか、いろいろ用意することがありますから」

「パート従業員は？」

「ふたりとも出勤が30分遅くて、11時からです。おなじ城山比呂志展の準備をしていました。突然、年長のパートさんが『水瓶と猫』の絵から猫が消えているといったんです。わたしはそれを見て、心臓が止まりそうでした」

城山比呂志展は台無しになる。先生には会わず顔がない。なにがどうなっているのか。和香奈はまったく状況判断ができず、溝口に相談に乗ってもらいたくて、かれのケイタイに電話を入れたという。

「溝口さんは桜田門の警視庁にいました。昼休み時間を利用して、日比谷公園で会ってくれたのです」

「その先はこうだ。猫の問題は保健所だ、警察は人間しか扱わないと、素っ気なく、いわれたんだろう？」

井伊がいった。

「いいえ。これは絵画の窃盗事件だ、所轄しよかつは築地警察署だから、そちらに被害届をだしなさい、とこまかく教えてくれました」

和香奈は画廊に近い交番に出むいた。20代の制服巡査が、その場で画廊にきてくれた。そして、「被害届」作成のための事情を聞き、ポラロイド写真を3枚ほど撮ってから帰っていった。

夕方ゆふぐわになっても、警察からはなんら音沙汰おとぎたがない。和香奈は不安になり、ふたたび交番に出むいた。被害届はまだ交番の巡査の手もとにあった。これから17時の交代で本署に帰る。「被害届」は地域課の上司の判断で、刑事課にまわる、という悠長ゆうちやうな説明だった。



個展の開催まで、もう時間がないんです。和香奈がそう説明しても、交番の巡査は急いで捜査する、という態度ではなかった。

「猫一匹いっぴきじゃな。築地署は銀座を管轄かんかつするし、1億円、数億円の宝石や貴金属類の強奪たうたつや詐欺事件などが目白押しだ。時価40万円じゃな」

「いい加減さんも、そうお考えなんですね」

彼女は怒った表情で、にらみつけていた。

「話をつづけて」

「わたしはもう一度、溝口さんと連絡を取りました。築地署は捜査してくれませんか。夜8時以降なら時間が作れる、といわれて、日比谷公園で会いました。彼は昼間とちがって、仕事疲れの顔でした。……盗品の油絵が出てくれば、連絡がくる。いま警察を急かしても、この事件だけでは、捜査は動かないだろう、といわれました」

井伊は黙ってきいていた。

「盗まれた油絵は諦めたほうがいい、という態度でした。溝口さんは二度も結婚式をすっぽ抜かしたうえ、わたしの悩みに乗ってくれない。こんな男と結婚して、はたしてうまくいくのかしら。このとき、いい加減さんの秘伝がふいに浮かびました、『溝口さんは、財産狙いの結婚でしょ。それが目的でしょ』

といったんです。かれはひどく怒りました。『オレをそんなふうに見ていたのか。見損なった。和香奈の顔など二度とみたくない。二度と電話などかけてくるな。永遠の別れだ』と言い放って立ち去っていきました」

夜の公園に独り取り残された和香奈は、もう死にたい、と自殺



への道がつのるばかり。世田谷のマンションに、どのように帰ったのかも、よく憶えていなかったという。

「着替えもせず、ベッドで泣き伏していました。本気で死のうと決めました。一方で、裏稼業人のいい加減さんならば、難事件を解決する、と思いつかべたのです。【新妻の悩み】を解決してくれた、真鍋美紀さんの話も重ね合わせて、夜明けを待ちました」

「冷凍食品が全滅する危機に、電話をかけてきたわけだ」

井伊はけさの状況を思い浮かべた。一方で、池袋店の冷凍機トラブルが店長代理の手でうまく処理できたのか、と気になった。ここで店に電話すれば、そちらに気が取られてしまう。いまは事件の解決に徹するべきだ、と自分自身に言い聞かせた。

「いまのわたしは大船に乗っています。いい加減さんが猫を連れもどしてくれるでしょ。あしたは挙式で、入籍できるでしょ。3月31日が披露宴でしょう。とても、うれしくて」

和香奈は明るい表情に変わった。

「依頼した、裏稼業人が誘拐犯として警察に捕まり、刑務所行きになるかもしれない。どうしましょうと、最悪の状況を心配してくれていない？」

井伊は彼女の顔をのぞき見た。

「いい加減さんは裏稼業人ですもの。すぱっと、見事に解決してくれるでしょう。その期待でいっぱい」

「難問をふたつも抱え、時間がなくなるばかり。焦っては負けだ」とわかっているが……」

「第一発見者のパートさんが怪しいのかしら？」

「なにか動機がありそうか？」

「とても良い人ですよ。入社して、30分間で、絵画をすり替える悪事をはたらく、そんな人じゃありません」

「むだな推理はさせないでくれ」

信号機の角を曲がると、フラワーランドの入口がみえてきた。和香奈の足が急に鈍^{にぶ}ってきた。

「さあ、逃げないで」

かれは和香奈の背中を押すそぶりです。園内に入った。サツキやバラはまだ早すぎるせいか、人出はほとんどなかった。それでも、彩の良いパンジーなど、春の花が陽ざしを浴びていた。

「どこをみても、城山先生

はいないわ。ラッキー」

彼女が陽気な口調でいった。

「デメリットを喜ばれたら、困るんだよな」

「いい加減さんは高い壁ができるほど、闘志^{とうし}が燃えてくるんですよ。ここは腕のみせどころ」

「まるで他人事だな。ここで、すこし城山先生を待ってみるか。そうだ、この時間を利用して、貸衣装屋に電話をかけてみたら。あしたの午後3時の挙式に間に合うように、花嫁衣裳を予約した



らしい」

「あの。わたしマンションに帰れば、ウェディングドレスも、お色直^{いろなお}しの和服も、一通りそろっているんですけど。それだとダメですか」

「そうか、鷹野家のご令嬢だったな。貸衣装とは無縁^{むえん}だ」

「実家のお手伝いさんにしたのめば、マンションから、銀座の画廊まで運ぶ段取りを取ってくれます」

「いまはまずい。仕掛けた誘拐事件は、まちがいでなく警察から家族に伝わっているはず。……犯人もしくは和香奈から、なんらかの連絡があれば、警察に知らせてほしい、と言われていると思う。ここは安易に、無事だと知らせないことだ」

溝口刑事の立場からすれば、犯人からなかなか連絡がこない、どうなっているのか、と不安がつる。

拘禁^{こうきん}された布施和香奈が、最悪の場合は多摩川で死体になっているはず。溝口刑事の不安と焦りが強まるほど、かれの心は和香奈への愛が深まる。それが井伊の作戦だった。

「溝口刑事の、新郎の衣装は？」

「ホテルの貸衣装屋さんで、ご用意してもらっていました」

「花嫁とはずいぶん段差があるな。ここは一発、溝口刑事にかけてみるか」

井伊はポケットから、赤いケイタイを取りだして、コールした。溝口刑事がすぐ出た。

井伊はあえて無言だった。

「池袋の裏稼業人だろう。和香奈はそこにいるのか。一言、声を聞かせてくれ」

「あと22時間の生命だ」

井伊は腹の底からわき出るような声でいった。

「たのむから、布施和香奈の声をきかせてくれ」

「彼女は多摩川で、死体になるまえに、二度目の結婚式をドタキャンした、真の理由が知りたいそうだ」

「捜査上の秘密だ。事件は未解決だから、話せない」

「真相は答えたくない、伝えておく。じゃあ、これで」

「待て。彼女を殺さないでくれ」

「布施和香奈とは、もう結婚したくなかったからだ、はっきり真実をいってやれ。冥土で魂が迷わずにすむ」

和香奈が赤いケイタイに耳を当ててきた。頬と頬を寄せ合う格好となった。

「ちがう。事実を話す。二度目の結婚式の2日前だった。八王子駅まえのスーパーで、毒ガスをまいた殺傷事件があった。犯人がつかった車が高尾山の山麓に乗り棄てられていた」

「新聞でも報道されていたな。何日後か、犯人は逮捕された。理



科系の大学院生だったと思う。それが捜査上の秘密か」

「実は……。事件発生後、ボクは防毒マスクを持参して、高尾山の山狩り捜査に参加していた」

「公安事件じゃなかったのか」

「スーパーで一般市民が殺傷されたから、合同捜査だった。夜明けの6時ごろ、ボクは結婚式ののために、山頂付近から下山をはじめた。蛇滝の近くまできた。いやな滝の名まえだったし、犯人はイペリットという猛毒を使っているから、ボクはあえて慣れない防毒マスクをかぶった」

「犯人に遭遇したのか」

「いや。登山道の木の枝で、足を引っかけた転倒して、運悪く滝口から滝つぼまで落ちてしまった。ボクは泳げず、沈んでしまった。気づいたら、病院のベッドのうえだった」

「ドジな刑事だ」

「防毒マスクを被っていたし、肺に水が入り、危篤状態だったらしい。手術のあと、絶対安静がつづいていた」



「どこの病院だ？」

「立川の総合病院」

「和香奈に事実を教えなかったのはなぜだ？ 警察庁の上司から、捜査人の失態だ、家族にもオフレコだといわれたのか」

「……。オフレコじゃない。」

二度も失態がつづいたし、和香奈や彼女の親族に、ぶざまな男だと思われたくなかったからだ。男のミエで

「本音はちがうだろう？ 男のしごとや捜査の内容を話すほど、知的な女だとは思ってない。そう伝えておく」

「止めてくれ。本心を正しく伝えてくれ」

「まだ、あるのか」

「病院から退院して、和香奈と会ったときだった。彼女がもう死にたい、生きるのが辛い、と泣きながらいった。可哀そうだった。……ボクはいっしょに死んでやる、といえなかった。滝つぼ転落の事実すら、羞恥と自分への気取りから、和香奈に話せなかった。ボクは勇気のない人間だったと、伝えてくれ」

ケイタイに耳をつけた和香奈が、

「日比谷公園で、心にもないこと言っておめんなさい。溝口さんが大好きなの」

と涙声でいった。



「和香奈、助けてやるからな」

「もういいだろう」

井伊が電話を切った。

「なぜ、もつとお話をさせてくれないんです」

和香奈の顔が本気で怒っていた。

「あれは城山先生じゃないか」

井伊があきらかにちがう、管理人らしき人物を指した。

「ぜんぜん違います」

和香奈の憤りはおさまらなかった。

井伊のケイタイ電話が鳴った。鬼頭統括部長からだ。井伊はすっかり報告を忘れていた、

「ニュージールランドの猫は、まだ見つからないのか」

「まだです。世田谷で見かけた、という情報があったもので、多摩川から移動してきて、用賀や、砧公園や、フラワールランドで、逃げた猫をさがしています」

「用賀？ わしの住まいがあるところだ。猫の行動範囲はそんなに広くない」

「ライオンも同類の猫科。だから、エサを漁^{あさ}って、遠くにいくのかと思った」

「銀座にもどれ。猫の行動は遠くてもせいぜい1キロか、2キロ

ていどだ」

「販売戦略会議を抜けてくるほど、部長は猫を心配している？」

「15分休憩だ。井伊店長はいつも肝心な点で報告がない。心配

になって電話を入れてみた。会議がなければ、わしが応援に駆けつけたところだ。作戦を指示してやらないと、上客の布施さまの期待に応えられない」

「動物愛護精神で、猫を心配しているのか、と思ったら、本心は商売だったのか」

「ニュージールランドから来日した猫だ。はぐれて可哀そうだ、という気持ちもある。猫は迷子になりやすいんだ。出かけた先で、野良猫のボスに睨にらまれると、自宅までまっすぐ帰ってこられなくなる。そして迷子猫になってしまうんだ」

「部長の家の猫は何匹？」

井伊はどうでもよい話題で、猫事件を悟られないようにした。「二匹とも、オスで2歳だ。生後2ヶ月のとき、動物病院からもらってきた。一匹は名まえが

『武蔵』で、いつもムーちゃんと呼んでいる」

「ネーミングは、『弁慶』のほうが良かったのに。飼主にそっくりで」

「ムーちゃんの水飲む顔がじつに可愛い。口のまわりの

髭ひげに、水玉をつけて、ぺちゃぺちゃ飲んでる。それに日向ぼっこが好きで、ワシが陽さしのある部屋で新聞を読んでいると、ひざの上に乗ってくる。背中を丸めたムーちゃんは、ほんわか



た感じた。頭をなでると、こちらの顔をみながら、にゃーと鳴く。気持ちがいいと、目を細める。可愛いものだ。いつも楯たて突く井伊店長に比べ、すなおだし、従順じゆうじゆんだ」

会議がはじまるまで、鬼頭は飼猫のはなしを聞かせるつもりらしい。

「ご飯のまえに、『お手』、『お座り』とやらせると、それもおぼえた。うちの猫は利口だ。ご飯食べるかいと、声をかけると、にゃあん、と返事する」

「人間の子どもでも、2歳になれば、そのくらいはできる。なにもわざわざ猫を飼わなくても」

「人間よりも可愛い。わが子は受験勉強をしろ、といってもだめだ。学校帰りに、夜遊びまでする。未成年なのに、隠れてタバコは喫すうし」

「さすが、部長の子どもだ。父親の若いころとそっくり」

「それに増して、池袋店の店長となると、会社方針と逆さまばかりやっている。素直さ、従順さ、謙虚けんこさがいちじるしく欠如している。ムーちゃんの爪のアカでも煎せんじて飲ませたいくらいだ」

「猫の爪には毒がある」

「毒などない」

「もう一匹の名は？」

「ランちゃんだ。これも可愛い」

「猫を抱いていると、ひざの上でオシッコされる。猫好きはとかく、そういう不都合は隠して話す」

「ランちゃんの躰しづはできています。トイレは向かいの敷地です」

「下水道料金の節約か。良い躰だ」

「そろそろ会議の時間だ。心配しているから、猫が見つかったら、電話をかけてくれ」



鬼頭の話は単なる時間ロスだった。猫事件を考えるうえで、

参考にもならない。嫌いな猫の話がながなが聞かされた。その不快感が井伊の胸の奥にモヤモヤ宿っていた。

かれの視線が和香奈にむけられた。彼女は清流の鴨と戯れるように、小川の縁にいた。いまの彼女はどんな想いなのか。溝口から聞いたドタキャンの真実を胸の奥に刻み込んでいるのだろうか。

井伊は小川の縁に歩み寄った。

「城山先生はどんな人物だ？」

「姉とおなじ美大の同級生です」

城山比呂志は高校を出て3年間ほど働いて、入学金をためてから美大に入っている。姉の麻耶子より3歳年上で、いまは34歳。住まいは木造アパートで、6畳2間。一室がアトリエですと、和香奈が図録から、城山比呂志のプロフィールを抜きだすような口調で教えた。

「貧乏暮らしが気楽で、自分にいちばん似合っている、と軽口を

いう、とても気取りのない先生です」

「本ものの芸術家だな」

「受賞歴は『水瓶と猫』の一作ですが、これからの作家です。将来は素晴らしい画家になると思います」

「いまは絵だけで食べていけない？」

「そうです。まだムリです。姉が設立した『きぬた美術教室』の講師と、新宿や高田馬場などの美大受験の予備校でも教えています。先生は海外にも創作の場をもとめていますから、デパートのウィンドー・ディスプレイなど夜のしごともありながら、お金を貯めているそうです」

「一昨年はニュージーランドにいき、現地で描いた、『水瓶と猫』がコンクールで受賞した、と彼女はつけ加えた。

「聞けば、城山先生の性格は温和そうだ。そういう性格なら、猫1匹が盗まれたくらいで、批判しないんじゃないか」

「わたし帰らせていただきます」

井伊はとっさに彼女の手首をつかまえた。手を離すと、彼女はアスレチックの階段を登っていった。

「きぬた美術教室は、どんなコースがある？」

井伊は下から話しかけた。

水彩画、油絵、日本画、陶芸科の4コース。講師は麻耶子、城山比呂志を含めた4人。みな非常勤講師の処遇しよぐうだとおしえる。

「城山先生は油絵だとわかるが、姉の麻耶子さんはなに科を受け持っている？」

「水彩です」

「受賞歴は？」

井伊は、カスケット帽子を被った麻耶子の姿を思い浮かべた。

「ありません。姉の作品にはポイントがないと、よくいわれます」

「油絵は全然やらな
い？」

「油絵の臭いが嫌いみたい。でも、最近の姉は油絵も手がけています。城山先生が海外に行つて留守にすれば、油絵科の代行講師もあるようです。

やはり、自分で油絵を描いてみませんか」

「自分が描けなくては教えられない。当然だ」

「わたしは姉に、水彩から、油絵の転向を勧めているんです」

和香奈は画廊勤めだ。鑑賞眼を育てるために、良い絵はつねに数多く観ているだろう。同時に、努力をしているはず。ある意味で、目が肥えている。

「長く水彩をやってきた実姉に、なぜ油絵を勧める？」

井伊が興味の日をむけた。

「水彩とちがって、油絵は絵の具を厚く塗り、盛り上げます。だから、絵自体に迫力が出てきます。姉の性格は男性的ですから、

油絵が似合っています。そのうえ、城山先生の猫のように、大胆に素材を取り込めば、きっと受賞ができます。わたしはそう信じています」

和香奈はTAKANO画廊の実務責任者だ。それだけに論理的なわかりやすい説明だった。

「妹の意見やアドバイスに、耳を貸すのかな、姉は？」

「こんどの水彩画はどう？」と2階の画廊まで見せにきます。わたしが納得できない点を指摘すると、その場では、ふん、という態度です。でも、直しを入れているようです。油絵はまだ一度も見せにきませんが」

「弱い面は見せない」

それも性格だろう、と井伊は思った。

「姉は商売が嫌いです。画材商の仕入れなど、従業員にすべて任せきり。美紗社長の手前、週に2度は銀座に出て販売していますけど……」

「途中で、四六時中、店から抜け出している？」

井伊にはかんたんに想像ができた。

「それはありません。出社すれば、お昼時以外は、開店から夜7時の閉店までいます。でも、絵の雑誌を読んだり、長電話をしたり、仕事にはまったく熱がない姉です」

「ビルオーナーの世継ぎとしては？」

麻耶子は鷹野家の実質的な、一人娘で跡継ぎだ。

「警備システムも全体を知ろうとしない、と美紗社長がなげくほ



ど、姉にはその気はないようです。施錠ができるのは、一階の画

材商と2階の画廊くらいかしら。ビル全体の仕組みなど、姉は憶える気すらないんです」

「絵描き一筋。その意志が強いんだろうな」

「あつ、城山先生がいた。あそこに」

和香奈はアスレチックのうえから指す。

ジャケツト姿の城山は細身の体躯たくだった。木製イーゼルを組み立て、キャンパスを置いている。

画家の道具や持ち物はかなり使

い古している感じで、貧乏画家という雰囲気だった。

城山が折りたたみ椅子に腰を下ろした。アルミ製の油絵道具ケースを広げてから、豚毛の油筆、油つぼ、絵の具などを取りだす。

描きかけていた絵の筆をとりはじめた。すでに猫が描かれていた。井伊は城山に歩み寄った。そして、肩書きのない名刺をさしむけた。

「探偵社の方？ それとも興信所？」

「ご推測に任せます」



「結婚調査なんですよ。わかっています」

城山がなおも名刺とこちらの顔を見比べていた。

「依頼主からの内容はしゃべれない」

井伊は調査員に成りすました。

「いずれ身辺調査があると思ってましたよ。麻耶子が両親に、わたしと結婚したいのだと打ち明けたときから」

「あなたの意志は？」

「美大時代の同級生で、仲のいいパートナーです」

彼の筆が猫に色をつけはじめた。

「人生のパートナー？」

「敷居の高い豪邸は苦手です。麻耶子から正月とか、誕生パーティーとか、茶会などに声がかかるけど、一度も訪ねたことはない」
銀座の画廊で、母親の美紗社長と会っても、人物が大きすぎて満足に口が利けないと話す。

「結婚の意志は？」

「ノー・コメントでもいいですか」

「あなたに答えを強要する権限はない。親が結婚を反対している理由は、知っているのかな……？」

それは誘導質問だった。

「父親は、娘の意志を尊重してくれる、と麻耶子から聞いています」

「美紗社長は？」

「猛反対ですよ。ぼくは絵描き一筋で、ビジネスマンじゃない。」

「商才しょうさいはない。養子に迎え入れたら、銀座の不動産など鷹野家の財産は守れない、というのが理由で反対。それは確かだし、事実そうなると思います」

「先生がそれを認めたら、美紗社長はなおさら大反対だ。麻耶子さんの意見は？」

井伊はさらに踏み込んでみた。

「探偵社の方なら、わかってながら、聞いているんでしょ」

「念のために」

「……布施家から妹を鷹野家にもどさせればいい。姉あねの自分は鷹野家から出て行く、という態度です。つい最近も、母娘ははなの間ではげしい口論になり、過去になく険悪な状況に陥おとっている。ボクは14日からTAKANO画廊で個展を開かせてもらうし、中立の立場しか取れない。ただ、興信所を使って、ボクの気持ちをさぐるなんて、美紗社長はずるい」

城山がパレットから筆を運ぶ。

「けさ、あなたの受賞作『水瓶と猫』を拝見しました。実に、良い絵だ。あの猫はニュージールランドで描いたもの？」

実際には絵の猫を見たことがなかった。

「日本の猫で、きぬた美術学校の隣家となりの飼い猫がモデルです。なんでもスーパールの部長さんとか」



「まさか鬼頭……？」

「そうです。その家の猫が、いつも教室にやってくるんです」

「好かない猫だ」

「でも、とても愛らしい猫で、いいタッチの絵ですよ」

「いいタッチの絵にしても、好きになれない。おじやました」

鬼頭からむ話題は好まず、かれは城山比呂志のそばを離れた。フラワーランド全体を見渡しても、和香奈の姿が見当たらなかった。どこに隠れているのか。

彼女のケイタイ電話は取り

あげている。それだけに、こ

のまま見当たらないと、厄介

な状況に陥おとってしまう。

赤いケイタイの電源を入

れた。微弱電波から、こちら

の場所が警察に特定される可能性がある。そのリスクを背負って、和香奈からの連絡を待つことに決めた。彼女がどこか公衆電話からかけてくるかもしれない、と。

赤いケイタイが振動した。あいては『母・美紗』の表示だった。

「和香奈。和香奈なの」

「おれは池袋の裏稼業人だ」

「おねがい、和香奈を返して」

美紗社長は悲痛な声だった。

「それなら条件をだす。和香奈の身柄と、TAKANO画廊に飾



られた、『水瓶と猫』と引き換えだ」

井伊は低い声でいった。

「作品は、どこにもって行けばいいの？」

「嘘をついたな。『水瓶と猫』の絵から、猫はもういないはずだ。信用できない女とは交渉しない。じゃあな」

「待つて。おねがい、

和香奈を殺さないで」

「猫を抹殺した奴はだれだ？ あんたか？」

「ちがいます。わたし

はけさ、札幌のひとに特別に観させてあげたとき、猫がいないこと

に気づいて驚いたくらいです。わたしは犯人を知らない」

「心当たりは？」

「きつと、札幌の男がからんでいます。警備などを探り、なにか魂胆がある目で、画廊のなかをみていましたから。私はすぐ切り上げ、帰ってもらったくらいです」

井伊は無言だった。

「水瓶と落葉なら、渡せます。おなじ画家のものです」

「受賞作でもない絵は必要ない。別の条件をだす」

「お金なの？」

「先回りしているな。これは三度目の正直だ、和香奈の結婚披露



をセットしろ。3月31日の仏滅だ。参列者300人分を前金として、あんたが現金で、会場に支払ってこい。2時間以内だ」

井伊の視線が、小鳥のポストの陰にいる和香奈の姿を見つけた。

「2時間以内というと、17時ね」

「決めた式場の名まえと、支払った金額を和香奈のケイタイにメールしろ。領収書は写真に撮り、添付するんだ」

「お金が裏稼業人に渡ったら、和香奈は解放してくれるのね」

「そちらしだいだ」

「和香奈のケイタイのアドレスは……？」

「長い通話を狙っているな」

「長い通話を狙っているな」と電源をOFFにした。かれは小鳥の巣箱まで歩み寄った。



「迷子になるなんて、幼稚園児なみだな」

「迷子じゃありません。先生には気づかれませんでしたか？」

「そんなに不安なら、城山先生に直接、気づきましたか、と訊いてくればいい」

「もう。意地悪なんですわ」

「母親の美紗社長と、連絡がついたぞ」

そのやり取りを一通り教えた。

「披露宴の参列者が300人だなんて……。刑事の妻になれば、

節約第一です。メロンも特売しか買わないつもり。質素な披露宴でいいんです」

「いまさら言われてもな。もう話してしまった」

「美紗社長は、溝口家と布施家の披露だから、そっちでお金を出しなさい、といます。あなたたちはもう3月13日に正式に結婚しているし、立て替えたお金だからといって、きつと取り立てにきます」

「金持ちほどケチだというからな。失敗だったな、芸術奨励金として、城山比呂志の口座に振り込め、という条件のほうがよかった」

「芸術奨励金なんて、美紗社長には一円も出す気などありません。城山先生の個展だって、ポーズなんですから」

「ポーズとは？」

「美紗社長にすれば、自分が推した城山作品がコンクール特選になりませんでした。だから、ほかの選者は観る目がない、城山比呂志さんの隠された才能は捨てがたい、鷹野美紗が今後は育てていく、という名目です。それはポーズなんです。若手を育てる気持ちなど、まったくありません」

「城山先生が、もし特選だったら？」

「それで終わりです。かりに城山先生から、TAKANO画廊で、個展を開かせてほしい、と美紗社長に申し出があったとしても、10年早いわよ、努力して有名になったら、協力するわ、という冷たい態度をとります。著名な画家とか、陶芸家しか相手にしな

い。それが画廊の格式だと、美紗社長は勘違いしているんです」

和香奈は、ふだん言えない母親批判を口にしてしているようだ。

「虚栄心が強い、女社長か」

「姉が怒ると、母への批判は強烈です。…:なによ、コンクールの審査員ぶっているけど、絵を観る能力はまったくないし、その目は節穴よ、と親に向かって、歯に衣を着せず攻撃します。母親も反撃しますから、すごい親子喧嘩になるんです。きぬた美術教室を立ち上げるときも、母は教室よりも、不動産ビジネスを勧めて対立しました。今回も結婚問題で対立しています」

和香奈が過去からの状況を教えていた。

「猫事件と結婚問題、ふたつは関係がありそうで、なさそうで」「たよりない、口ぶり」

「猫事件の解明の手がかりはないし。ここは一度、原点にもどるか。事件現場からスタートだ」

「これから初動捜査ですか？」

あしたの挙式は大丈夫ですか」

「投げ出したくても、投げ出せない。裏稼業人のつらさだ。これから銀座のTAKANO画廊にこよう」

ふたりはフラワーランドを後

にした。そのさき砦公園を通り抜けていると、傾いた太陽が森の梢とからまり、網の目のような光を射していた。



「おれの推理だが、猫事件の容疑者のひとりとして、溝口刑事を疑っている」

「えっ、まさか。溝口さんが犯人だなんて、なぜ？」

彼女の目にはおどろきの光があった。

【つづく】

写真協力・奈良美和さん（コーチ／コミュニケーションアドバイザー）

絵画協力・高田雄太さん（画家）

取材協力・写真提供（猫）・中村裕子さん（博雅・豊島区）

写真提供（猫）・中嶋賢子さん（会社員）

取材協力・森田画廊（銀座一丁目）、PIGA（青山）

【協力者および提供者は、本文とまったく関係ありません】